

Title	「アーティキュレーション」概念の検討：言語的社会化とアイデンティティを考えるために
Sub Title	On "Articulation" : a study of linguistic socialization and identity
Author	椋尾, 麻子(Mukuo, Asako)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2002
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.55 (2002.) ,p.55- 67
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000055-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「アーティキュレーション」概念の検討

—言語的社会化とアイデンティティとを考えるために—

On “Articulation”:

A Study of Linguistic Socialization and Identity

椋 尾 麻 子*

Asako Mukuo

The purpose of this paper is to examine the theory of “articulation” which has been developed by Stuart Hall who is known as a leader in the field of cultural studies. The term of “articulation” has a double meaning; a sense of speaking or expressing on one hand, and a sense of connecting parts on the other (though the linkages are not necessary). It is thus understood that a theory of articulation is both a way of understanding how ideological elements come, under certain conditions, to cohere together within a discourse, and a way of asking how they do or do not become articulated, at specific conjunctures, to certain political subjects.

Methodologically, there are two approaches in the discussions on identity: structural-functionalism and interpretive paradigm. Hall mediates them dialectically, and enables to show that the subject is discursively constructed. He describes that identification is not only *being* but also *becoming*, that is, identities are not static or essentialized but always ‘on-going’ and be in the wars of position.

In this article, I would like to discuss the theory of articulation, and try to expand this idea into a linguistic socialization theory.

1. はじめに

「自己」「主体」「アイデンティティ」に関しては、いわゆる「近代」社会との関連で、これまで多くの議論がなされてきた。だが、産業社会、国民国家などが実態として転換し、理論的にも相対化されるなかで、アイデンティティ論は再考を迫られている。

社会化や教育の過程、およびその理論化についても同様である。たとえば、在日外国人の子どもたちや帰国子女は、複数のナショナル／エスニックなアイデンティティをめぐって「あれかこれか」の選択を迫られる。そこでは、国-ネーション-言語-文化の「四位一体」¹⁾ (小森 1998) の枠組みの強固さ、すなわち近代国民国家に根ざしたアイデンティフィケーションの強迫、逃れがたさが確認できる。これは帰国子女らの例によっても顕在化するわけだが、無論、他の者が免れるものではない。だが、ナショナ

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程 (社会学・文化研究)

ル／エスニック・アイデンティティのカテゴリライズ、本質化に対しての懐疑、違和感を拭えないのも確かである。そうした問題意識を、従来の教育社会学／教育の社会学にカルチュラル・スタディーズなどの知見を組み込んだ議論の展開を図ることで、深めていけるのではないか。スチュアート・ホールをはじめとするカルチュラル・スタディーズの一連の議論は、共同体や文化の統一性を所与とみなすことへの批判的視点を有しているからである。本稿では、アーティキュレーションを社会化によって可能となるものと措定し、この概念について再検討する。

ホールが「アイデンティフィケーション」とほぼ同義のものとして概念化する「アーティキュレーション articulation」は（後に詳述するが）、①ある意味が発話もしくは表明されるということと、②その意味はあるものとあるものが互いに結びつけられているということとの、二重の意味合いをもっている。たとえば、私（筆者）が自らを「日本人」で「女性」だとアーティキュレート／アイデンティファイするとき、それは①「私は日本人の女性です」などと表明することであり、②「私」と「日本人」と「女性」といった要素を節合させていることになる。このように考えると、個人が役割やそれをもとに構成されるアイデンティティを意識化、言語化するプロセスと、アーティキュレーションとが重なり合ってくる。自己のアイデンティティを表象（表現）する語彙はどのように獲得されるのか。またその語彙＝言説はどのように社会的に構築（構成）され、拘束力をもち、また変化するのか。

つまり、言語的社会化によって可能となる「アーティキュレーション」とは何か、また、アーティキュレーションによって言説（の布置状況）がいかに変遷、再構築されるのか、という二側面を、特にナショナル／エスニックなアイデンティティに着目し、探究することが、筆者の関心であり、本稿の目的である。

なお、はじめに注意を促しておきたいのだが、私がここで考えている社会化／アイデンティティは、達成されたり、完成（固定化）されたりするような性質のものではない。個人が生涯を通じて絶えず再構築、更新されるものととらえており、その意味でエリクソンのアイデンティティ観やいわゆる本質主義とは距離をおいている。また、ここにおける「言語的社会化」は、純粋な意味での「言語習得」の水準にとどまったものではない、ということもあらかじめ述べておきたい。

本稿の構成は以下のとおりである。はじめに、理論的背景として、これまで社会学、特に教育社会学においてなされてきた社会化論を概観するとともに、カルチュラル・スタディーズの問題構制をもとに、筆者の視座を明らかにする。第3節にて、スチュアート・ホールのアーティキュレーション論を紹介し、次いでその限界も含めて検討したうえで、最後に社会化論との接続の可能性を示唆したい。

2. 本論の理論的背景

2.1. 社会化論をめぐって

個人と社会との関係や、アイデンティティに関しては、従来の社会学、文化人類学における「社会化 socialization」（もしくは「文化化 enculturation」）。両者の厳密な区別は本稿では割愛する）といった概念と関連付けて考えることができる。

たとえば、「異文化間教育」という研究領域があるが、これは、教育学、言語学、文化人類学、社会学などを背景とした学際的な分野である。そこでは、外国人子女、帰国子女、留学生の「不連続」な文化化の過程（およびその問題解決）として異文化間教育が構想されている（たとえば江淵 1997 など）。翻ってみれば、従来論じられてきた社会化／文化化は、ある一つの文化体系の下でなされる「一次元的」

「連続的」な過程であり、その結果としてのアイデンティティもそのようなものとして了解されてきたといえる。果たしてそれは妥当なのか。彼／彼女らを「例外」として異文化間教育論に任せたまにするのではなく、「社会化」自体を問い直す必要がある。

一般に、社会化とは、個人が生活する（しようとする）社会に適切に参加することが可能になるような価値や知識や技能などを、他者との相互作用のなかで習得する過程である、とされる。さまざまな定義のなかでの共通項としてみられるのは、①当該社会における成員性の習得・学習過程である、②他者との社会的な相互作用の過程である、③個人のパーソナリティを社会体系に結びつける過程である、とする見解である（渡辺 1992；柴野 1992 など）。

理論的な潮流としては、構造機能主義的パラダイムと解釈論的パラダイムという二つの大きなものに分けられる。すなわち、前者はパーソンズ、マートンらに代表されるが、社会化を社会システムの機能要件として考察し、シンボリック・インタラクショニズム、エスノメソドロジーなどの流れを汲む後者は個人の学習過程という側面を強調して社会化を論じている。しかしながら、社会化を論じる際に二者択一的／排他的にいずれかの立場でなければならない、という性質のものではないだろう。むしろ両者が相互補完されることによって、社会化をよりうまく説明しうるはずである²⁾。

ところで、社会化の過程で、獲得・内面化されると想定されるようなものとは（それが実体視しうるものなのかどうかはとりあえず措くとして）、具体的にはいったい何なのだろうか。たとえば、パーソンズ等による構造機能主義的アプローチによれば、社会化によって特定の価値へのコミットメントが可能となり、役割取得の能力が習得されるといわれる。また、文化人類学における文化とパーソナリティ研究などでは、当該社会集団の行動様式が習得されると説明されるだろう。

本稿では、社会化で獲得される能力といったものをアーティキュレーションの可能性と類推して、つまり、社会化によってアーティキュレーションが可能となる、と措定して今後の議論を展開したい。そうすることによって、言語的社会化とアイデンティティとの関連がより明確になると考えるからである³⁾。

2.2. カルチュラル・スタディーズという視角

一方、いわゆる言語論的転回以降の思潮を背景に、主体の言語的な構成／脱中心化を論じるのが、ポスト構造主義、ポストモダニズムやカルチュラル・スタディーズの流れである。ここでは従来の民族・エスニック集団の関係性を規定するさまざまなイデオロギーの問題点、矛盾を批判するような言説が、近年しばしばみられる。本稿でとりあげるカルチュラル・スタディーズは、体系的な理論の制度化を避ける傾向があることから一概に説明しがたいが、日常生活でのさまざまな言説を、具体的な文脈において分析・解釈する実践だといえる。そこでは、一般的な社会的／政治的問題はもちろん、文学、音楽、映画などといったポピュラー・カルチャーも分析対象となる。カルチュラル・スタディーズは、特定の歴史や社会状況によって構築されたものである「文化」の恣意性・政治性およびその権力関係を問うており、人種やジェンダー／セクシュアリティなどに関わる社会運動にも大きな影響を与えている。R. ウィリアムズ、E. P. トンプソンらの論考にはじまる一連の研究は、1970年代のバーミンガム大学現代文化研究センター（CCCS）のプロジェクトなどでよりさかんとなり、そこを震源地に世界各国に広まった⁴⁾。

カルチュラル・スタディーズは文化による差異化・序列化に着目する点で、従来の社会学、たとえば文化的再生産論などと問題関心を共有しているにもかかわらず、現在の学問領域としては、とりわけ日

本における導入の際には、それとは別個のものとして発展してきたように思われる。それはひとつには、それらが当初マスコミュニケーション論の一形態として専ら注目され、そうした領域に押し込められてきたという事情がある⁵⁾。だが、もうひとつ、カルチュラル・スタディーズ自体に内在的な理由として、マルクス主義の影響を受け、政治やイデオロギー、および学問のディシプリンの双方への「介入」を強く志向していることが指摘できる。たとえばアルチュセールや、グラムシの「ヘゲモニー」概念を援用し、マイノリティの「抵抗」の道を示そうとしている。そうした強い政治的姿勢が、カルチュラル・スタディーズの大きな特徴となっている。

本稿における私の立場は、このカルチュラル・スタディーズの議論によるところが大きい。だが同時に、これらの言説／語りの「スタイル」に対して、以下の理由から違和感を抱いてもある。第一に、それらは既存の序列化されたカテゴリーに（それを否定するにせよ、戦略的に利用するにせよ）依存しており、しかもそれを温存、再生産させる危険性が残る点で、抑圧-被抑圧の構造を脱構築するには困難があるのではないかということだ。第二に、カルチュラル・スタディーズの論者が極めて自覚的に表明する、いわゆる「発話の位置 speaking position」に関する問題がある。彼／彼女らはアイデンティティについて議論するにあたり、自らが他者の集団のために語る資格があると示すために個人的なバックグラウンドに言及することがしばしばある（モーリス＝鈴木 2000: 191-192）。研究者・知識人がそのように自らの発言の影響力を鑑みることは重要なことであるものの、その議論が自らの経験のみに回収されてしまい、本来の意図とは逆に他者との対話を閉ざしてしまうという事態も懸念される。この論点は一見、これまでの議論から外れたものと思われるかもしれない。だが、これは知識人自身のアイデンティフィケーションと絡む事柄であり、既存の学問の理論と実践、研究者としての個人と生活者としての個人の乖離についても（自己）批判する、カルチュラル・スタディーズの構制それ自体と直結している。カルチュラル・スタディーズを標榜する知識人もまた、「〇〇系××人」「男性／女性」…としてしか語りえない。自らが問題視する既存のアイデンティティ、カテゴリーの「本質化」から解放されがたい、というのもまた確かなのである。

3. アイデンティティとアーティキュレーション⁶⁾

本節では、カルチュラル・スタディーズの一連の議論⁷⁾、とくにその英国における展開の中心人物と目されているスチュアート・ホールの「アーティキュレーション」概念を手がかりに、言語とアイデンティティの関係を検討する。

ここでとくにホールに着目するのは、自らカリブ海世界出身で英国在住の「ディアスポラの知識人 a Diasporic Intellectual」(Chen 1992=1996)である彼が理論化した「アーティキュレーション」概念は、アイデンティティのあり方を、構造的な不平等などのさまざまなポリティクスとの関係のなかで理論化しようとするように、ホールは文化主義⁸⁾と構造主義とを弁証法的に架橋しようとして試みている点で、本稿と問題意識を共有しているからである。

3.1. スチュアート・ホールの「アーティキュレーション」概念

スチュアート・ホールは、「アイデンティティは決して単数ではなく、さまざまで、しばしば交差していて、対立する言説・実践・位置を横断して多様に構成される」ものだとする(Hall 1996=2001: 12)。この論点を明確にするためにホールは、「アイデンティティ」を「縫合の点」であると規定する。「縫合 suture」は、主体が自らを取り巻く「他者の言語」と結びつくことを意味しており、「節合 articulation」

とほとんど同じ意味で使われている。

私は「アイデンティティ」という言葉を、出会う点、縫合の点という意味で使っている。つまり、「呼びかけ」ようとする試み、語りかける試み、特定の言説の社会的主体としてのわれわれを場所に招き入れようとする試みをする言説・実践と、主体性を生産し、「語りかけられる」ことのできる主体としてわれわれを構築するプロセスとの出会いの点、〈縫合〉の点という意味である。このようにして、アイデンティティは言説の流れの中に主体をうまく節合もしくは「連鎖化」させた結果である。(Hall 1996: 5=2001: 15)

ホールにあってはあくまで、文化的アイデンティティとは「あるもの」というだけではなく「なるもの」なのである (Hall 1990=1998: 93)。

ホールは、articulate「節合する」ことに関して、そのもともとの語義に「明瞭に発話する」ことが含意されていることや、車体同士の連結／分離が自在な「節合」的トラック（トレーラー）といった用法に言及する。そのうえで、それが第一に発話行為そのもの、言語行為や表現そのものであり、第二に、特定の条件下で、二つの異なる要素を統合することができる、連結の形態を意味し、そのつながりは、いかなるときにも常に、非必然的、非決定、非絶対的かつ非本質的なもの、すなわち「非必然的な照応 *no necessary correspondence*」なのだと説明する (Hall 1985, 1996: 14=2001: 29; Grossberg 1996: 141=1998: 33-)。つまり、アーティキュレートされる諸要素は（それは概念や理論であったり、運動であったり、また集団や諸個人であったりするのだが）、「必然的な照応 *necessary correspondence*」でも、「必然的な非照応 *necessarily no correspondence*」でもなく、「必然性のない照応」の関係にあると概念化されているのである。すなわち、一方では文化を本質とみなして既存のカテゴリーを単純に再生産するような近代的言説である「本質主義」「文化的人種差別主義」（＝「必然的な照応」）を批判する。他方、肌の色は文化的なアイデンティティとは本質的に関係がない、などといった、ポストモダン的な「反本質主義」（＝「必然的な非照応」）とも、確信犯的に異なったスタンスをとるのである (小笠原 1997a: 196)。

こうしてホールは、諸要素に必然的な結びつきがないにもかかわらず、一定の条件のもとで、それが統一を保ちうる時、その諸要素の結びつく過程を問題とする。この諸要素の結びつき、すなわちアーティキュレーションによって、特定のアイデンティティが可能となるのだ⁹⁾。

ここで留意すべきなのは、ホールがアイデンティティを問題にするのは、それが単に個人の主観的表象だけにとどまらないからだ、ということである。ホールは、ソシュール以降の構造主義による記号論モデルを流用し、諸実践を言説的に、すなわち言語のように機能するものとして議論を行なっている。そこでは、言語体系は、社会的実践、語り、神話のようなあらゆる意味作用 *signification* の構造に対するアナロジーとして使われる。ホールの問いは、この意味付与のプロセスがどのように構造化されるのかということにあるのだ。つまり、どのようにしてひとつの意味が確固たるものとして受容され、その一方でそのほかの意味が退けられ、周縁化するのかが問われている (Turner 1996=1999: 257-258)。いわば意味作用のポリティクスが問題とされるわけだが、ここに意味の体系たる「文化」についての、カルチュラル・スタディーズの基本的視角を見出すことができよう。ホールにおいても、もちろん、さまざまな社会／政治的コンテクストのなかに「文化」を位置づけることが重要となる。

文化的アイデンティティはそれ自身の歴史を持ち、そしてその歴史にはそれ自身の現実的、物質的、象徴的な効果がある。過去は私たちに語りつづける。しかしそれ（過去）はもはや私たちを単一の事実としての「過去」へと位置づけはしない。というのは、過去と私たちの関係は、母と子の関係のように、常にすでに「切断の後」にあるものだからである。それは常に記憶や幻想や語りや神話を通じて構築されている。文化的アイデンティティとは、歴史と文化の言説の内部で作られるアイデンティフィケーションの地点、アイデンティフィケーションや縫合の不安定な地点である。それは本質ではなく、一つの位置化 (*positioning*) である。したがって問題のない超越的な「起源の掟 (Law of Origin)」に絶対的に保証されることなどないアイデンティティの政治、位置の政治が常にあるのである (Hall 1990=1998: 94)

このように、ホールは広い意味で、社会が言語的に構成されているという視点をとり入れながらも、なお歴史のなかでの主体に、つまり歴史を背負い、歴史をかたちづくる「主体的なもの the subject」にこだわりつけている (吉見 2000: 21)。かくして、アイデンティティの非本質性と、社会的規定性をどのようにとらえるかが問題となる。

3.2. アイデンティティと共同体／歴史性

ところで、ホールのいうように、アイデンティティが意味作用のポリティクスによって可能になるのだとしたら、同様に共同体 (の統一性) というものも、また何らかの意味作用／言説によって成立しているのである。そもそも、共同体あるいは集団としてのアイデンティティと個人のアイデンティティとは、相互規定的なものであるはずだ。

それでは、ホールがいうところの「文化的アイデンティティ」は、集団あるいは個人のアイデンティティとして、どのようにとらえていけばよいのだろうか。また、アイデンティフィケーション=アーティキュレーションの政治的・集団的な側面と心理的・個人的な側面とを、いかに見ればよいのだろうか。

竹村和子は、アイデンティティを「自己に対して差異を生ずるもの」ととらえ、間主観的なその「政治」行為は、自己であらざる自己への応答という内主観的な「倫理」的行為へと接続されていくものだとする (竹村 2000: 24-25)。そして自己の言語による還元不可能性、「名づけの過剰さ」(竹村 2000: 49) と対峙することを強調する。そうした「アイデンティティの中断」という倫理実践と、政治実践との(再=)接合を考えると、竹村はアーティキュレーションに言及している¹⁰⁾。

……自己が言語的に形成されるということは、自己のアイデンティティが一つの文によって分節化されると同時に、それを横断する多数の文に脱分節化ということである (これをラウとムフは「ヘゲモニー的な分節化」と呼んだ)。自己は、あるアイデンティティとして自己を分節化したとたんに、そのアイデンティティを横断する別の差異化軸によってそのアイデンティティが脱分節化され、曖昧化される。この分節化／脱分節化の双方向作用というヘゲモニーの新しい概念化によって、言語的な統治権力 (言語中心主義) の陥穽におちいらずに、主体の言語的構築というポストモダニズムの理論と、規範的な主体からの解放という民主主義の可能性が両立しうることになる (竹村 2000: 51)。

このように「アーティキュレーション」の2つの側面として分節化／「脱」分節化を考えるならば、アイデンティティを次のようにイメージすることができる。さまざまな言説を通じて自己を語るということ、ホールに立ち返れば、その場その場で要素がアーティキュレートされるということは、多方面からあたるスポットライトの中心に「自己」が見てとれるような単純なもの(図1)ではないだろう。つまり、それぞれの要素の集合、いわゆる確定記述の束としてアイデンティティが見出される、ということでは必ずしもないはずである。

むしろ、無理に図で示すならば図2のようなものとなる。言語＝言説を指向性／権力性を帯びたものとして「矢印(→)」で表わすとすると、社会はさまざまな「→」が交錯する「網の目」とみることができよう。ある時点(t1)のある「言語(言説: →)」において自己を語る時、別の「自己」でありえたかもしれないその可能性と、その表現からは零れ落ちてしまう、はみ出してしまうような自分、つまり他者性と直面することとなる。そこでは単に言説と言説との結び目、交錯点にアイデンティティが立ちあられるということではなく、特定の「言語」すなわち言説に取り込まれつつも、そこに巻き込まれまいとまた別のことばを求めていく営みがある。

図1

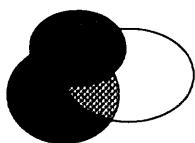
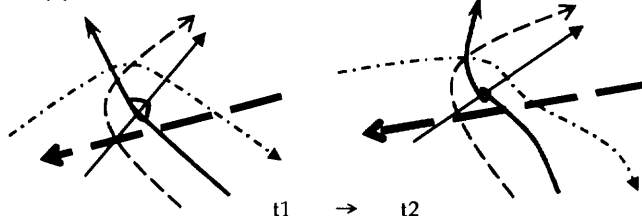


図2



結局、自らの状況を説明する語彙は、言説の網の目のなかから見出さざるをえない(〇〇人だから、男/女だから、社会階層が低いから、等々)。文化的差異の発話行為は、つねに既存の言説から異質な諸断片を動員し、新たな偶発的方法によってそれらの断片を結合するのである(酒井 1997: 154)。それはちょうど、翻訳の際に適切な言葉を選択することと似ている。また、そうした発話行為によって、言説の網の目自体も再構成、変容を繰り返すこととなる(t2)。この行為こそ「アーティキュレーション」なのであり、そこで用いられる、あるいは事後的に見出される「語彙」こそ、ホールのいうところの「要素」なのだとも考えることもできるだろう。

このように、アーティキュレーションの過程は、「規範の内面化」といった単純なものにとどまらない。いわゆるパーソンズ流の規範主義に基づく社会化論とは、一線を画するものなのである。

3.3. アーティキュレーション概念の課題と可能性

しかし、アイデンティティが(理論的には)不安定であったとしても、個人が、アイデンティティから全く自由になれるわけではない。とくに、ナショナル・アイデンティティについては、この傾向が顕著である。

そこで、言語と関連させつつ、ホールのアーティキュレーション概念やアイデンティティ論において残された課題を、「歴史性」と「節合の要素」という二つの面から示していきたい。

第一の論点は「歴史性」である。たとえば、酒井直樹(1996)が「共感の装置としての国語」というように、言語は国民国家イデオロギーの要であり、ナショナル・アイデンティティを強く規定する資源と

なっている。また、(たとえば自動車を運転できるという技術が持っている文化などと比べて)「国民国家」と結びついた文化だけが唯一の文化として受け入れられている理由を、「言語の共同性と歴史性」にみることができる。

では、「非必然的な照応」であるところのアーティキュレーション、およびその効果としての文化的アイデンティティにおいて、「過去」「歴史」といったものがどのように扱われるのか。現在の「私」が「過去」から引き継がれていると想定しうる限り(それが「自己に対して差異を生ずる」(竹村 2000: 24)ということ、つまり「差延」という意味合いにおいてであるとしても)、アーティキュレートされる言説・要素は限定されるだろう。つまり、決して節合されえない言説、語りえないアイデンティティがあるはずである。とすると、ある主体が自らを語る際、彼/彼女にとっての「過去」はある意味「本質化」されてしまうのではないか。ひいては、「非必然的な照応」であるところのアーティキュレーション=アイデンティフィケーションは、むしろ「必然的な照応」に接近してしまうのではないかと考えうるのである。

さもないと、もはや過去からの連続体としての主体は語りえず、その場その場での「私」が浮遊するような、「必然的な非照応」に傾斜していくのであろうか。しかし、それはホールの意図するところとは異なるはずである。ホールはいう。

私たちは誰もが、特定の場所と時間から、種別的な歴史と文化から言葉を書き発ししなければならない。私たちが言うことは常に「状況に関係づけ」られ、位置づけ (*positioned*) られている。(Hall 1990=1998: 90-91)

「種別的な歴史と文化」が強調されるとき、先に述べた諸言説の「網の目」が、けっして均質的なものではないことが明らかになる。つまり、ホール自身が述べるように、あらゆる表象、言説は、その「歴史的種別性 *historical specificity*」から「切り崩すのが非常に困難な傾向性の磁力的な配列」に構成されているのである (Grossberg 1996=1998)。したがって、ある個人の行なうアーティキュレーションの可能性は無限に開かれているわけではない。そこには一定の傾向があると指摘できるのだ。

この歴史性を鑑みると、ナショナル・アイデンティティ (およびそれをめぐる諸言説) の堅牢性もうなずける。

国民的アイデンティティとはアイデンティティの一群の無数の星座のなかでも中心部を占拠するという性質を持つものであるゆえ、シティズンシップを規定するマーカーは、それ自身が境界共有をする集団 (たとえば宗教、政治運動、エスニックに少数者といった種類のもの等) を規定するマーカー群に強力な影響力を及ぼす傾向を持つ。(モーリス=鈴木 1996: 50)

国民共同体 (民族あるいは人種共同体も同様な論理で構想される) への帰属は、身分や職業などに基づく個と個の関係を飛び越えて、個人と全体としての共同体を直接に結びつける。(酒井 1996: 173)

と同時に、「ポスト・モダン的な傾向の意味を把握しようと試みるモダニスト」¹¹⁾としてのホールの理論的な不安定さが窺えるのである。

さらにより根本的な問題として、そもそも節合される「要素」とは、一体何なのだろうか。これが第二の論点である。ホールの表現では、あたかも「要素」があらかじめ所与の、自覚的なものとして実体化されているようにもとらえられる。

これを前記の歴史性の点とあわせて考えたとき、ホールのいう「位置化 *positioning*」と彼が批判するところの本質化との間に、それほどの相違が果たしてあるのだろうかという疑問が生じる。違いがあるとするなら、両者を分かつものは何なのか。アイデンティティが完成／固定化されたものではないということ、「過去」は唯一の事実としてあるのではなく、常に言説／表象において構築の過程にあるとされることが関連するのは確かである。この点は、私もホールに同意する。

だが、ホールは、アーティキュレーションを「特定の条件下においての、要素間の非必然的な照応」という。しかし、むしろ、この「要素」自体、アーティキュレーションによって事後的に了解可能なものとして見出されるのだととらえたほうがより適切であろう。つまり、アーティキュレーションは、もともと存在する要素を結びつける過程ではなく、要素を産出する過程だと考えるべきなのではないか。「アイデンティティは、言説の外側においてではなく、内側において構築されるものである」(Hall 1996 = 2001: 13) というホールの主張を適切に汲み取るべきであろう。

ホールのアプローチは、構造機能主義と解釈的パラダイムを弁証法的に媒介し、新たな視座を開く可能性を有している。だが、それゆえに、その理論はアンビヴァレンスでもあるのだ。

4. むすびにかえて

前節まででは、アーティキュレーションを社会化によって可能となる行為と仮定し、この概念を検討した。社会化で獲得される能力をアーティキュレーション能力と同じ／類似したものと仮定したわけだが、うえでの考察を鑑みると、それはさらに、さまざまな言説（権力）へアクセスするための能力と換言できるかもしれない。ここでいう「さまざまな言説」とは、たとえば歴史、国民的／集合的な記憶をめぐる表象が挙げられよう。

社会化（およびそれに基づくアイデンティティ）とアーティキュレーションとを関連付けて考えたとき、そこではある程度の一貫性・連続性のあるアイデンティフィケーション、自己言及が要請されているように思われる。先に「歴史的種別性」によるアーティキュレーションの限界について述べたが、社会化に立ち返って考えてみても、社会システムにおける一定の役割遂行や、自己の「同一性（時間的連続性を含む）」といった意味から、それが無限定的なものなのではないといえる。換言すれば、個人は社会化の過程において、誕生時には無限にある（かもしれない）潜在的可能性を、相互作用をつうじて、伸張すると同時に一定の方向性／範囲に限定していくこととなる¹²⁾。それは整合性のある、矛盾を隠蔽した形でなされていく。

さて、本稿では個人のアイデンティティに焦点を当てて論じてきたが、うえのような様相は、集団的アイデンティティ、とりわけナショナルなアイデンティティにも同様にみることができよう。たとえば、「国民」のアイデンティティ、帰属意識の源泉となる国史は、「国」という統一体としての自己言及、アイデンティフィケーションといえ、レベルは違うにせよその意味で、個人が一貫した、整合的なアイデンティティを語ろうとすることの類推ができる。それに関係して、言語も、その正統性すなわち地域的／時間的な一貫性を担保するような言説が要請され続けてきた。また、一見、多民族の共存、多元性という側面に目が向けられがちであろう多文化主義でさえも、さまざまな物語のせめぎあい、矛盾を隠

蔽し、より大きな国民的な物語を構築するためのものとも読みとれることから、広義／高次のナショナリズムと解することが可能である。こうしたことから、私は、個人のアイデンティティと集団的アイデンティティとを相動的、連続的なものとしても構想しうるのではないかと考える。

しかしながら、これまでは個人の記憶と、国史などの歴史／集合的記憶とは、ともにアイデンティフィケーション／アーティキュレーションの資源であり、結果でもあるにもかかわらず別の次元と見なされてきた（モーリス＝鈴木 1998: 43）。すなわち、学校で教わる歴史と、「私」の記憶とは切り離されて考えられてきた。現在、このことが問い直される時にあるのではないか¹³⁾。

個人、集団（ネーション）いずれにおいても、その時間的／空間的な同一性を保障、強化すべく、言説の（再）構築が図られることを指摘した。ここでさらに問わねばならないのは、それが本来、きわめて政治的な次元のものであるにもかかわらず、あたかも中立的、普遍的なもののみなされる、政治性が隠蔽される（ましこ [1997] 2001: 302）ということである。個人と集団／社会の関係を考えるうえで、すなわち社会化の観点で、重要な論点だと思われる。これに関しては、機会を改めて考えてみたい。

最後に、今後の研究の課題と展望をもって、本稿のむすびとしたい。

まず、理論の展開として、社会化という人間形成のプロセスを、脱構築的／批判的にみる、ということには、可能性と困難が伴う。私見では、教育とは非常に「近代的な」営みである。だからこそ、従来の教育社会学での社会化論と構造機能主義とが適合的であったといえよう。それもまた見方を変えれば「近代的な」言説戦略（の産物）ではある。だがその意味で、本稿のようなカルチュラル・スタディーズ的視座を組み入れた形での社会化論の構想をする際、これまでの理論との連関が課題になるだろう。この点で、アメリカにおける「批判教育学 critical pedagogy」の旗手であるヘンリー・ジルーの以下の言明は示唆に富む。

私〔ジルー〕はCS〔カルチュラル・スタディーズ〕を、エージェンシー、ボイス（発言）、そして可能性という問題を取り上げる類いのモダニズムと、主体、言語そして差異の問題を批判的に脱構築化するポストモダンのディスコースの同じ局面とを収斂させる機会を提供する政治的教育的プロジェクトとして見たい。（Giroux 1992=1996: 132）

さらに、今後の可能性についても触れておきたい。第一には、社会化の具体的な場面のケーススタディに入り、理論を跡づけていくことである。たとえば渋谷真樹（2001）は、従来の「帰国子女」研究が国民文化やアイデンティティを固定的かつ本質的なものとする前提のもとに展開されてきたことを問題視した。そこで渋谷は、理論的にはカルチュラル・スタディーズを、方法論としてはエスノグラフィを採用して、解決を図ろうとする。すなわち、ホールの「位置取り positioning」というタームの援用と、ある中学校の帰国子女学級のモノグラフとを組み合わせることで、渋谷なりの回答を出しているのだ。それは、「帰国子女」など特定のカテゴリーに限定的であり、また言語的社会化を主題とする本稿とは趣旨を異とする。だが、カルチュラル・スタディーズの姿勢からすれば、理論の搾取、奪用にとどまるべきではなく、エスノグラフィとつなげるという渋谷の手法は、有効であるといえる。

他方、理論の一層の洗練が求められることは言うまでもない。「アイデンティティを表象の外部ではなく内部で構築されるものとして理論化しようと試み」るのであれば（Hall 1990=1998: 102）、ホールに倣ってたとえば映画や音楽を題材に、もしくは言語それ自体に踏み込んだ／踏みとどまったうえで、理

論の精緻化を図らねばならないだろう。また本稿のような主題は、シンボリックインタラクショニズムや自己の構築主義、物語論（たとえば浅野 2001; 片桐 2000a, 2000b）などに部分的に通ずるものの、それらがカルチュラル・スタディーズの関心と重なり合うことはこれまでほとんど指摘されてこなかった。諸理論を接続＝「アーティキュレート」することによって、新たな議論が展開できるものと期待したい。本稿はその足がかりとなることを企図している。

ジル（1992＝1996: 135）の言葉を借りれば、「言語は、人々が彼ら自身の自己という感覚と折り合いをつけるために使う主観的立場と、ある特定の社会の基礎を形成する制度に意味や正統性を与えるイデオロギーと社会实践、双方ともに可能にする」。この過程を明らかにするのが「アーティキュレーション」であり、個人、社会、言語をめぐる理論、実践双方の可能性を開くものなのである。

注

- 1) そこには、国民としての「日本人」、国民文化としての「日本文化」、そして国民言語としての「日本語」といった実定性がみられる（酒井 1996: 131 など）。
- 2) とはいえ、本稿の論調はいささか解釈論的パラダイムに傾斜しているのかもしれない。
- 3) なお、言語と社会化に関しては、バジル・バーンステイン（1973＝1980 など）による、言語的社会化論も見逃せない。バーンステインは、（社会）言語コードという概念を手がかりに、言語運用と階級との関係を論じ、象徴的統制の理論を展開した、社会化論において重要な理論家であることは言うまでもない。しかしながら、本稿で私が試みようとする議論とは、その位相が若干異なるようにも感じられる。「バーンステインは、みずから自己の理論的源泉がデュルケム、マルクスにあると明言し、構造主義、ポスト構造主義、ネオ・マルクス主義といわれる諸理論を批判する側に廻った」（柴野 2001: 33）という点で、本稿は理論的立場をやや異にしているためである。バーンステインの言語的社会化論と本稿の主題との異同についての詳細な検討は、機会を改めて行ないたい。
- 4) もっとも、カルチュラル・スタディーズと多文化主義など政策との関係、およびその理論的背景は、国や地域の状況によって微妙に異なる。
- 5) たとえばホルのエンコーディング・ディコーディング・モデルがその典型だ。こうした指摘については、小笠原（1997b: 42）などを参照のこと。
- 6) “articulation”の訳語は、基本的には「アーティキュレーション」とカタカナ表記しているが、文脈によっては「分節化」「節合」などと使い分けている。ただし引用範囲については、「接合」など表現がまちまちであるが原文のままの表記である。個人的には、あえて日本語でセツゴウと書くのであれば、ふしを意味し、綱やひもの結び目なども指す“knot”の当て字であった「節」を用いるほうが不自然ながらも字義的に「接」より適しているように感じる。
- 7) ただし、先に述べたように、「カルチュラル・スタディーズ」は体系化された理論でも、一定の方法論を共有した「学派」でもない。むしろ、そのような類型化を拒絶するところにカルチュラル・スタディーズの「アイデンティティ」が存在するといってもよいだろう。それが、cultural studies と複数形で称される所以でもある。
- 8) この文化主義的アプローチは、文化を人々によって生きられ、経験され、実践されるものととらえる（吉見 2000: 19）ことから、ある意味、社会学における主体論、解釈的パラダイムにもつながるものといえる。
- 9) もちろん、これはナショナルなものに限らない。たとえばジェンダーなどについても同様に考えられよう。
- 10) 竹村は、ここで直接ホルの名を明示しているわけではないが、ホル自身が触発を受けている、ラクラウとムフ（Laclau and Mouffe 1985）によるアーティキュレーションの議論から引いているものであり、本稿に引用するうえでまず差し支えはないと考える。
- 11) ホールとのインタビュー（Hall 1996＝1998）におけるローレンス・グロスバーグの言葉。
- 12) このことは、チョムスキー（の生成文法理論）が、人間はすべて言語能力においては可能性をもっている、言語運用になると退化させられているという「人間の悲劇」を語っている、とのバーンステインの評価（Bernstein 1977＝1980: 242）にも重なる。
- 13) 近年、「記憶」に関しては、構築主義的アプローチの展開などにも伴い、さまざまな研究や議論がなされている。とりわけ、(脱)国民国家論やポストコロニアル研究、カルチュラル・スタディーズなどの文脈で、戦争体

験の記憶などに関するものが数多くみられる。またこれに関連して、歴史教科書の記述の問題など、政治的な論争も繰り広げられている。こうした流れから、モーリス・アルヴァックスの「集合的記憶」論が再読されるなどの動きもみられる。管見では、うえにあげた諸潮流が融合した形で論じられることは未だ少なく、ましてそれを教育、社会化の文脈で論考したものはほとんど見受けられない。

参考文献

- 浅野智彦, 2001, 『自己への物語論的接近——家族療法から社会学へ』勁草書房。
- Bernstein, Basil, 1973, "Social Class, Language and Socialisation," Karabel, Jerome and A. H. Halsey eds., 1977, *Power and Ideology in Education*, Oxford University Press.=1980, 佐藤智美訳「社会階級・言語・社会化」, 潮木守一・天野郁夫・藤田英典編訳『教育と社会変動——教育社会学のパラダイム展開 下』東京大学出版会: 237-262.
- Chen, Kuan-Hsing, 1992, "The Formation of a Diasporic Intellectual: An Interview with Stuart Hall," Morley, David and Chen Kuan-Hsing eds., 1996, *Stuart Hall: Critical Dialogue in Cultural Studies*, Routledge.=1996, 小笠原博毅訳「〈インタヴュー〉あるディアスポラの知識人の形成」『思想』859: 6-30.
- 江淵一公, [1994] 1997, 『異文化間教育学序説——移民・在留民の比較教育民族誌的分析 (第2版)』九州大学出版会。
- Giroux, Henry, 1992, "Resisting Difference: Cultural Studies and the Discourse of Critical Pedagogy," Grossberg, Lawrence, Cary Nelson and Paula Treichler eds., 1992, *Cultural Studies*, Routledge=1996, 大田直子訳「抵抗する差異——カルチュラル・スタディーズと批判教育学のディスコース」『現代思想』24(7): 129-147.
- Grossberg, Lawrence ed., 1996, "On postmodernism and articulation: An interview with Stuart Hall," Morley, David and Chen Kuan-Hsing eds., 1996, *Stuart Hall: Critical Dialogue in Cultural Studies*, Routledge.=1998, 甲斐聰訳「ポスト・モダニズムと節合について——ステュアート・ホールとのインタヴュー」『現代思想』26(4): 22-43.
- Hall, Stuart, 1996, "Introduction: Who Needs 'Identity'?", Hall, Stuart and Paul du Gay eds., 1996, *Questions of Cultural Identity*, 1st edition, Sage Publication.=2001, 宇波彰訳「誰がアイデンティティを必要とするのか?」宇波彰, 柿沼敏江, 佐復秀樹, 林完枝, 松畑強訳『カルチュラル・アイデンティティの諸問題 (誰がアイデンティティを必要とするのか?)』大村書店: 7-35.
- , 1992, "THE QUESTION OF CULTURAL IDENTITY," Stuart Hall, David Held and Tony McGrew eds., *Modernity and Its Futures*, Polity Press in association with the Open University, 274-316.
- , 1990, "Cultural Identity and Diaspora," Williams, P., L. Chrisman eds., 1994, *Colonial Discourse and Post-colonial Theory*, Columbia University Press: 392-403. =1998, 小笠原博毅訳「文化的アイデンティティとディアスポラ」『現代思想』26(4): 90-103.
- , 1985, "Signification, Representation, Ideology: Althusser and the Post-Structuralist Debates," *Critical Studies in Mass Communication* 2(2): 91-114.
- 小森陽一, 1998, 『〈ゆらぎ〉の日本文学』NHK 出版。
- 片桐雅隆, 2000a, 『自己と「語り」の社会学——構築主義的展開』世界思想社。
- , 2000b, 「自己の構築と記憶」『情況』第二期 11(7): 110-125.
- Laclau, Ernesto and Chantal Mouffe, 1985, *Hegemony and Socialist Strategy: Towards a Radical Democratic Politics*, Verso.=1992, 山崎カヲル・石澤武訳『ポスト・マルクス主義と政治——根源的民主主義のために』大村書店。
- ましこひでのり, [1997] 2001, 『増補版 イデオロギーとしての「日本」——「国語」「日本史」の知識社会学』三元社。
- モーリス=鈴木, テッサ, 2000, (大川正彦訳)『辺境から眺める——アイヌが経験する近代』みすず書房。
- , 1998, 大久保桂子訳「グローバルな記憶・ナショナルな記述」『思想』890: 35-56.
- , 1996, 「文化・多様性・デモクラシー——多文化主義と文化資本の概念に関わる小考察」『思想』867: 38-58.
- 小笠原博毅, 1997a, 「素描・カルチュラル・スタディーズの増殖について」『現代思想』25(11): 188-201.
- , 1997b, 「文化と文化を研究することの政治学——ステュアート・ホールの問題設定」『思想』873: 41-66.
- 酒井直樹, 1997, 『日本思想という問題』岩波書店。

- , 1996, 『死産される日本語・日本人——「日本」の歴史-地政的配置』新曜社.
- 柴野昌山, 2001, 「文化伝達と社会化——パーソンズからバーンステインへ」, 柴野昌山編, 2001, 「文化伝達の社会学」世界思想社.
- , 1992, 「社会化と社会統制」, 柴野昌山・菊池城司・竹内洋編, 1992, 『教育社会学』有斐閣: 50-70.
- 渋谷真樹, 2001, 『「帰国子女」の位置取りの政治——帰国子女教育学級の差異のエスノグラフィ』勁草書房.
- 竹村和子, 2000, 「アイデンティティの倫理——差異と平等の政治的パラドックスのなかで」『思想』913: 23-58.
- Turner, Graeme, 1996, *British Cultural Studies: An Introduction* Second Edition, Routledge.=1999, 溝上由紀・毛利嘉孝・鶴本花織・大熊高明・成実弘至・野村明宏・金智子訳『カルチュラル・スタディーズ入門——理論と英国での発展』作品社.
- 上野俊哉, 2000, 「ディアスポラ」『現代思想』28(3): 44-47.
- 渡辺秀樹, 1992, 「家族と社会化研究の展開」『教育社会学研究』50: 49-65.
- , 1989, 「家族の変容と社会化論再考」『教育社会学研究』44: 28-49.
- 山本雄二, 1996, 「言説的实践とアーティキュレーション——いじめ言説の編成を例に」『教育社会学研究』59: 69-88.
- 吉見俊哉, 2000, 『思考のフロンティア カルチュラル・スタディーズ』岩波書店.